

## 達成動機研究の概観と看護領域への応用の検討

—健康教育対象者および看護者自身の動機づけの側面から—

門 間 晶 子・白 井 みどり

### 要 約

達成動機研究の流れを概観し、健康教育対象者や看護者自身の動機づけにおいて、達成動機の考え方を導入することの可能性や課題を検討した。

1. 達成動機研究は、達成動機づけを決定しているものが動機そのもの、期待と価値、目標のいずれであるかによって3つの立場に分かれた。
2. 達成動機とは、「その文化や社会、あるいは自分自身が価値あると見なしている物事を成し遂げようとする意欲」であると考えられる。競争的・自己充実的な2側面をもち、それらは保健行動や看護者の動機づけに対して、別個の作用をすると考えられる。
3. 達成動機は、健康教育において学習者への適切な支援方法を予測・評価するための、学習者の特性把握に使用しうると考える。
4. 看護の各現象の中で達成動機とその下位概念の分析、類似概念との比較を行い、その概念を用いた研究を積み重ねるとともに、適切な測定用具が提案されることが求められる。

キーワード：達成動機、動機づけ、保健行動、健康教育、看護管理

### I はじめに

生活習慣病に代表されるような慢性疾患の増加、人口の高齢化、価値観の多様化などにより、人々が自分自身の健康について学ぶ過程がいっそう重視されている。またヘルスプロモーション推進の気運が高まり、プリシード・プロシードモデルに代表されるように、生活習慣等行動の変容や健康度の向上自体は中間目標とし、最終目標はあくまでもその人のQOLにおく発想が広く受け入れられつつある<sup>1)</sup>。そこでは健康学習者の主体性やエンパワメントに注目することで、伝統的な患者医療者関係の見直しをはかり、健康教育のアセスメントから評価までの一連の過程において、健康学習者と共同して取り組む姿勢が看護者に求められる。看護者が、健康に関する学習や行動に関係する要因、とりわけ動機づけについて検討することは意義深いと考えるが、人々が健康について学ぶ過程や健康により行動をとるための条件、動機づけなどの理論を基にした教育・援助の方法論は十分に検討されているとはいえない。

筆者らは、「達成動機」という概念を用いて中高年女性の自覚的健康度や生活習慣との関連<sup>2)</sup>を検討した。対象が女性のみであったこと、望ましい生活習慣実行者が多かったことなどから、詳細な検討はできなかったが、いくつかの生活習慣と達成動機の下位概念である自己充実的達成動機が関連しており、達成動機が保健行動に関連する概念である可能性が示唆された。また達成動機と保健婦のエンパワメントとの関連を検討したところ、自己充実的達成動機が保健婦のエンパワメントを促進していた<sup>3)</sup>。また看護職のリーダーシップや職務満足と達成動機との関連が検討されており<sup>4,5)</sup>、さらに看護教育の領域では学生の達成動機に注目した研究が進められている<sup>6)</sup>。これらより、達成動機が健康教育対象者あるいは看護者自身の動機づけを考える際に応用しうる可能性があると考えられた。心理学領域で検討されてきた動機づけや達成動機について、速水らは、子どもの場合は学習、大人の場合は仕事という二領域のみを想定してきたが、動機づけは本来一生を通してあらゆる場合に遭遇する心理的事象であると述べている<sup>7)</sup>。本稿では、看護の対象

達成動機研究の概観と看護領域への応用の検討

となる人々の保健行動予測や健康教育の効果、および看護者自身が仕事を遂行する上での動機づけ等を考える上で有用な示唆を得るために、これまでの動機づけや達成動機に関する研究を概観した。

II. 達成動機に関する研究の経緯

1. 動機づけについて

人がなぜある行動をとるのかという疑問は、動機づけ理論を基盤とする。動機づけとは、行動の理由を考える際に用いられる大概念であり、行動を一定の方向に向けて生起させ、持続させる過程や機能の全般を指す<sup>7)</sup>。動機づけ研究には、さまざまな立場があるが、緊張や要求低減が行動の根本原理であるとする生理学的動機づけ、目標達成への期待と価値への認知のありようが行動を決定すると考える認知的動機づけ、能動的な存在である人間に特有な主観的要因が行動の原因となると考える人間的動機づけ、のそれぞれを重視する立場が代表的であるとされている<sup>8-10)</sup>。

2. 達成動機概念の登場と研究の流れ

1) 達成動機の登場

動機づけ研究において「達成」が取り扱われるようになったのは、Murrayがパーソナリティを行動から論じようとする中で欲求を定義し、そのリストの中に「達成」

を含めたことによると言われている<sup>8, 10)</sup>。心理学辞典によると、Murrayは達成への欲求を「困難なことを遂行し、自然・人間・思想を支配・操作・組織すること、またこれらをできるだけ早く、自力で行うこと、困難を克服し高い水準に達すること、自己に打ち勝つこと、他者と競争して勝つこと、才能をうまく使って自尊心を高めることなど」とした<sup>8)</sup>。McClellandらはこのMurrayの定義を基盤におき、自らが開発した投影法を用いて被験者が書いた空想物語が達成的であると評価する基準を、卓越の水準を競うこと、独自の達成を目指すこと、長期的に達成目標に関わること、と設定することによって達成動機の定義を明らかにした<sup>10, 11)</sup>。

2) 達成動機決定についての3つの立場

その後はMcClellandとAtkinsonらが、時には共同し、時には独自に研究の流れをつくった<sup>10, 12)</sup>。達成動機研究には3つの立場があり、「何が達成動機づけを決定しているか」によって動機そのもの、期待と価値、目標のそれぞれを重視する立場に分かれた<sup>10, 12)</sup>。達成動機研究には、直接的に達成動機を扱ってきた研究（狭義の達成動機研究）と、隣接する領域を扱う中で達成動機に注目し、間接的に達成動機を扱った研究（広義の達成動機研究）とがある<sup>10)</sup>。両者を含めた達成動機研究の流れ・分類を図1に示す。達成動機づけを決定するものとして、動機そのものを重視する立場、期待と価値を重視する立場、この2つの立場が登場した。1980年代以降に目標を重視

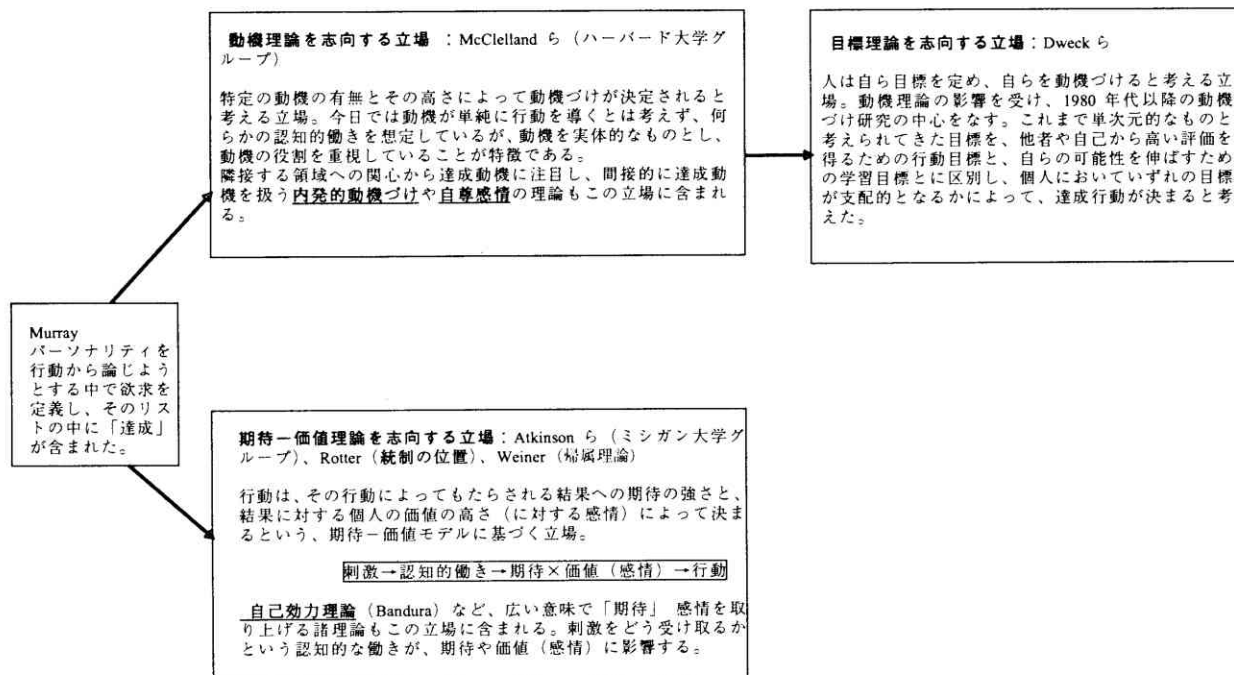


図1 達成動機研究の立場

する立場が登場したが、これは後述するように、動機理論の影響を受けている。

McClellandらは、達成動機づけは動機の有無と高さによって決定されるという動機理論の立場をとり、内発的動機づけや自尊感情の理論もこの立場に含まれた。またMcClellandらが開発した投影法によって、宗教、教育内容、親の養育態度等から達成動機を高めている内容を抽出し、その後の電力消費量との関連から、達成動機を高める社会文化的背景と経済成長との関係を数量的に検証する研究が発展した<sup>9,11)</sup>。

Atkinsonや統制の位置を提唱したRotterらは、刺激をどう認知したかによってもたらされる期待と価値感情の関係によって達成動機づけが決定されるという期待-価値理論の立場をとり、達成動機の個人差に注目した<sup>10)</sup>。Atkinsonは失敗の危険を覚悟しながらも達成を求める個人の傾向をrisk-takingと呼び、達成と失敗回避の2つの動機によって達成行動が導かれるとした<sup>13)</sup>。広い意味で「期待」感情を取り上げる自己効力感などの理論もこの立場に含まれる<sup>10)</sup>。

目標理論は、人は自ら目標を定め、自らを動機づけるとする立場であり、動機理論の影響を受けて<sup>10,14)</sup>、1980年代の動機づけ研究の流れの中心となった。Dweckは、目標を分類し、他者や自己から高い評価を得るための行動目標と、自らの可能性を伸ばすための学習目標とを区別し、目標によって行動が異なることを示した<sup>15)</sup>。

### 3. 関連する用語

達成動機研究の流れの中で登場し、主な対象領域の一つとして達成行動を扱う<sup>10)</sup>用語を、達成動機との関連性から整理する。

#### 内発的動機づけ

知的好奇心や向上心など、それ自体を満たすことを目的とする欲求が内発的動機づけである<sup>16)</sup>。これは、何か他の欲求を満たすための手段としてある行動をとるという外発的動機づけに比べ、学習促進には優位であると一般的には考えられてきた<sup>7,17,18)</sup>。内発的動機づけは、学習や環境探索への動機づけを基盤に達成行動を説明するという点で、達成動機研究における動機理論志向の立場に含まれる<sup>10)</sup>。鹿毛による達成動機と内発的動機づけの違い<sup>18)</sup>を参照すると、堀野・森による達成動機の下位概念<sup>14)</sup>のうち、競争や社会・文化的価値の達成に焦点を当てる「競争的達成動機」は内発的動機づけと相違点が多く、自分自身の価値に基づいた達成を目指す「自己充実的達成動機」は共通点が多いと考えられる。

#### 自尊感情

自分自身を基本的に価値あるものとする、自己に対する評価感情であり、その人の言動や意識態度を基本的に

方向づける<sup>9)</sup>とされている。自尊感情を持つことで、人は積極的に意欲的に経験を積み重ね、満足感をもち、自己に対しても他者に対しても受容的であり得る、という意味において、精神的健康や適応の基礎をなす<sup>9)</sup>。保健行動を規定する個人の要因として、よく使用される概念である。達成動機との関連では、達成場面での失敗が自尊感情への脅威となるという点が注目され、動機理論志向の立場に含まれている<sup>10)</sup>。

#### 自己効力感

個人の行動遂行能力に対する確信の程度を自己効力感といい(Banduraによる)、強いほど実際にその行動を遂行できる傾向にあり、行動を予測しうると考えられている<sup>8,19)</sup>。そのため、保健行動との関連においてよく使用されている概念であり、一般的な尺度や特定の状況において使用する尺度が作成されている<sup>19)</sup>。広い意味で「期待」感情を取り上げていることから、達成動機研究の領域では、期待-価値理論志向の立場に含まれる<sup>10)</sup>。

#### 統制の位置(所在)

Rotterらが提唱した性格特性の一つで、自分の行動に対する結果をコントロールするのが自分の力であるのか(内的統制型)、外的な力であるのか(外的統制型)についての認知様式である<sup>9)</sup>。達成動機研究との関連においても、伝統的な期待×価値モデルに属すると見なされている<sup>10)</sup>。内的小および外的な統制感が達成動機の尺度妥当性の指標として用いられており、内的統制感と達成動機が有意に相関しているという報告がある<sup>20)</sup>。速水らによると<sup>7)</sup>、達成行動を説明するのに達成動機という構成概念に続いてよく用いられるのが統制の位置である。

その他の類似概念として、人と環境との相互作用の視点から、内発的動機づけの発達の基盤となり、人が環境にうまく適応する能力を表す「コンピテンス」<sup>8,18,19)</sup>や積極的な保健行動との関連が示唆されている「首尾一貫感覚(コヒアレンス感)」<sup>21)</sup>などがある。

### 4. わが国における達成動機の考え方

日本では、林が達成動機の研究を紹介し、宮本が「その文化において優れた目標とされる事柄に対し、卓越した水準でそれを成し遂げようとする意欲」と定義し、やはり社会文化的に価値があるものへの達成という側面が強かった<sup>14)</sup>。土井は、達成動機には親和的なもの(親和は親密とは異なり、拒否されることへの恐れや不安の解消のために他者に依存したり利用したりするという意味<sup>10)</sup>である)と非親和的なものがあり、達成動機が親和的になるか否かは社会文化的要因によると述べている。集団が個人より重視される日本では親和的達成動機が、逆にアメリカでは非親和的達成動機が一般的であるとし

## 達成動機研究の概観と看護領域への応用の検討

ている<sup>22)</sup>。

堀野は、達成欲求を社会的なものとの個人的なものに分けたBendingの考えを取り入れ、従来「社会・文化的に価値があるものへの達成」の側面が強かった達成動機を多角的に捉え、社会的・文化的に価値が認められなくとも、個々人において重要な価値をもつものへの達成という側面に注目した。これを「個人的」達成動機として従来からの「社会的」「成功・挑戦的」達成動機に加え、一個人におけるこの3欲求の関係に関心をよせた<sup>23)</sup>。その後、堀野・森は、文化社会機構における価値観の反映に偏らず、個人の成長動機をより捉える方向で研究を進め、達成動機概念を「競争的」と「自己充實的」の二側面から捉え直した。「競争的達成動機は他者をしのぎ、他者に勝つことで社会から評価されることを目指す達成動機」であり、「自己充實的達成動機は他者・社会の評価にはとらわれず、自分なりの達成基準への到達を目指す達成動機」である<sup>24)</sup>。

### 5. 達成動機の測定方法

達成動機の測定については、動機のような無意識の欲求は投影法でなければ測ることができないというMcClellandの考え方が主流を占めており、主題統覚テスト(TAT)、洞察テスト、言語刺激、不完全物語法などがあった<sup>10,12)</sup>。現象としてみられる達成行動については、行動観察によるものが多かった<sup>12)</sup>。その後、簡便さと客観性・信頼性を求めて、測定法は次第に投影法から質問紙法へと変遷している<sup>25)</sup>。質問紙は、1970年代以前にEdward's Personal Preference Schedule (EPPS)、BendingがEPPSの一部を使用し、社会的・個人的の2領域から構成した達成欲求測定尺度<sup>12,23)</sup>、順応的・自立

的な2領域で構成されたCalifornia Psychological Inventory (CPI) 等があった。堀野はBendingの質問紙を翻訳・加筆した12項目にCPIなどの項目とさらに独自に8項目を加えて合計26項目の達成動機質問紙を作成した<sup>23)</sup>。堀野と森が見直し後に作成した「達成動機測定尺度」<sup>24,26)</sup>は、各設問に対する「全然当てはまらない」から「非常によく当てはまる」までを7段階で評定し、高い信頼性係数が報告されており、尺度の使用に伴って妥当性の検証が進められている<sup>24,26)</sup>。この尺度は大学生を対象とした研究から出発しており、その後、森・堀野は児童用の達成動機尺度を開発した<sup>14,20)</sup>。堀野と森による達成動機測定尺度の最新の項目<sup>14)</sup>を表1に示す。

### 6. 再び、達成動機とは

これまでの研究の流れ等から、達成動機は「その文化や社会、あるいは自分自身が価値あると見なしている物事を成し遂げようとする意欲」と捉えることができると考える。そして達成動機には、「価値ある」と見なすものの質や意欲が生じる場面の相違によって2側面があり、他人との比較や競争、あるいは社会的な名誉・地位・成功に基準をおいて達成を求めようとする側面と、他人との競争や社会的な評価基準にはとらわれず、自分の個人的な充実感に基準をおいて物事に取り組もうとする側面の2つの要素があると考えられた。

## Ⅲ. 達成動機を用いた国内の看護における研究

### 1. 健康教育・保健行動に関する研究

自己効力感や自尊感情に比べると、保健行動予測や健康教育のモデルに達成動機概念そのものを用いた研究は

表1 達成動機測定尺度(堀野, 2000)

自己充實的達成動機項目 他者・社会の評価にはとらわれず、自分なりの達成基準への到達を目指す達成動機	競争的達成動機項目 他者をしのぎ、他者に勝つことで社会から評価されることを目指す達成動機
1. いつも何か目標を持っていたい。	1. 物事は他の人よりうまくやりたい。
2. 決められた仕事の中でも個性を生かしてやりたい。	2. 他人と競争して勝つとうれしい。
3. 人と競争することより、人と比べることができないようなことをして自分を生かしたい。	3. 競争相手に負けるのは悔しい。
4. ちょっとした工夫をすることが好きだ。	4. どうしても私は人より優れていたと思う。
5. 人に勝つことより、自分なりに一生懸命やるのが大事だと思う。	5. 勉強や仕事で努力するのは、他の人に負けないためだ。
6. みんなに喜んでもらえるすばらしいことをしたい。	6. 今の社会では、強いものが出世し、勝ち抜くものだ。
7. 何でも手がけたことには最善を尽くしたい。	7. 就職する会社は、社会で高く評価される場所を選びたい。
8. 何か小さなことでも自分にしかできないことをしてみたいと思う。	8. 成功するということは、名誉や地位を得ることだ。
9. 結果は気にしないで何かを一生懸命やってみよう。	9. 社会の高い地位を目指すことは重要だと思う。
10. いろいろなことを学んで自分を深めたい。	10. 世に出て成功したいと強く願っている。
11. 今日一日何をしようかと考えることは楽しい。	
12. 難しいことでも自分なりに努力してやってみようと思う。	
13. こういうことがしたいなあと思うとワクワクする。	
14. 自分の好きなことにうまくなるためには努力する。	

少ない。勢力動機が高い人はストレスをもちやすく飲酒が多いといわれており、競争的達成動機はその勢力動機に近い概念であるという間接的な報告はある<sup>24,25)</sup>。堀野ら<sup>26)</sup>は、抑うつとソーシャルサポートとの関連に、達成動機の質がどのように関連するのかを検討し、自己充實的達成動機が高い場合は日常的な落ち込みを感じる事があっても、抑うつを形成しにくく、反対に競争的達成動機が高い場合は、落ち込みやすく、抑うつを形成する場合もあることを示している。また、ソーシャルサポートが抑うつに対して有効となるかどうかは、その人の達成動機の質により、自己充實的達成動機の高い人はソーシャルサポートを有効に活用して抑うつを形成しないことを示唆している。筆者ら<sup>2)</sup>は、中高年女性を対象に自己充實的達成動機と生活習慣や健康度との関連を検討した。健康度とは明確な関連は得られなかったが、自己充實的達成動機の高さといくつかの望ましい生活習慣との間には有意な関連が認められた。

## 2. 看護者や学生の動機づけに関する研究

看護教育や看護職者の学習やリーダーシップ、職務満足などに関する達成動機を用いた研究はいくつかある<sup>3,4)</sup>。松永ら<sup>5)</sup>は、看護教育において最近達成動機が注目されているとし、堀野らが開発した尺度を用いて、看護学生の看護技術テストの評価との関連を検討している。競争的達成動機の強い学生にはやりがいや継続意欲を持たない者が多く、自己充實的達成動機が高い学生にはやりがいを肯定する者が多かった。一方、婦長のリーダーシップ機能と達成動機との関連を検討した研究<sup>4)</sup>では、競争的達成動機が高い場合は、集団における課題解決・目標達成機能および集団維持機能とも高くなるが、自己充實的達成動機が高い場合は、自分自身を高めたり深めたりするための努力が集団の目標・課題達成にはつながらないため、集団における課題解決・目標達成機能が低くなった。筆者は保健婦の主体性、コミュニティへの影響、家族への励ましをエンパワメントとして、自己充實的達成動機との関連を検討したところ、自己充實的達成動機が高いことによって保健婦のエンパワメントが促進されていることがわかり<sup>3)</sup>、特にそれは経験10年未満群の若い保健婦について顕著であった<sup>27)</sup>。塚原らの研究<sup>5)</sup>では、看護婦の職務満足と競争的達成動機には負の相関があり、これは競争的達成動機が高い看護婦は、負けたくないという意識から現状に満足できないためと解釈されている。一方、自分の地位を高めたり看護婦同士の相互関係をよくすることへの満足感と自己充實的達成動機は関連していた。

## V. 看護における、達成動機を用いた研究の可能性と課題

### 1. 健康教育・保健行動における達成動機

まず、達成動機の考え方を健康教育・保健行動への動機づけに取り入れることについて考える。保健行動への動機づけを強める方法として、報酬や褒美等、従来は内発的動機づけを妨げると考えられていたものの有効性が指摘されている<sup>28,29)</sup>。またPenderは、保健行動変容につながる内発的・外発的動機づけの組み合わせや、内発的動機づけに対する外発的動機づけの重要度の発達段階による相違を検討課題としている<sup>28)</sup>。これらのことから、健康教育・保健行動における動機づけを考える際、従来からの内発的・外発的という分け方を用いての説明には限界があると考えられる。また動機づけには、特に成人の場合、内発的・外発的の両方に重なり、学習そのものを目指す一方で実用性を特徴とする「必要性の動機づけ」があるという見方<sup>17)</sup>があり、健康教育・保健行動における動機づけは、この必要性の動機づけに該当する場合が多いと考える。例えば、病気の進行予防のために運動や食事について学習する、治療のために禁煙する、などである。速水らは達成動機を、この「内発と外発の間に位置する」動機づけとして捉えており<sup>17)</sup>、このことは、健康教育・保健行動における動機づけを考える際に、達成動機の考え方を取り入れる有効性を支持しているものと考えられる。

次に、健康教育・保健行動と関連が深いと考えられる達成動機の要素・側面について考える。達成動機の側面として、個人的・集団的側面および親和的・非親和的側面等が指摘されてきた<sup>22)</sup>。保健行動への動機づけは本来個人的なものであるが、行動継続のために周囲の協力や励まし（ソーシャルサポート）が重要であること、環境との関係など個人の行動のみでは解決できない問題を含んでいること、専門家主導ではなく、コミュニティの健康を追求しようとする住民意識が高まっていること等から、集団的な動機づけの要素を含むと考える。また親和・非親和については、最近では親和よりもさらに積極的な人間関係構築の要素を含む親密動機が達成動機研究において重要であると指摘されている<sup>10)</sup>。

これらのことより、今後の健康教育・保健行動に関する動機づけを考える際、個人にとっての「必要性」に注目した働きかけ、達成動機を用いた「集団的」側面の検討、「親密動機」との関連での検討等が必要であろう。

### 2. 学習者の特性としての達成動機

市川は、「この子はこのような動機が強いので、こうやればやる気がでる」というような個人の学習動機に応じた指導方法を提唱する一方、教育とは何かを考える視

## 達成動機研究の概観と看護領域への応用の検討

点から問題点を指摘し、個人ごとに学習効果が最大となるような方法を処遇することが教育ではなく、学習者自身が自らを知り、自分にあった学習方法を模索していくことこそ必要であると述べている<sup>19)</sup>。健康教育・保健行動においても、Penderは、基本的には変えようがない個人特性のうち、認識に働きかけて行動を変える可能性があるものを見いだして働きかける必要性を指摘している<sup>20)</sup>。健康教育場面において対象者をグループ分けし、個別指導と集団学習を単独、あるいは組み合わせて実施し、効果を検討する試みが行われている<sup>30)</sup>。達成動機は、適切な尺度を用いることによって、健康教育におけるグループ分けに用いることができると考える。即ち、達成動機の全体的な高低や構成要素同士の関係（自己充実的達成動機と競争的達成動機達成動機のどちらが優勢であるか、等）の個人差によって、有効な健康教育方法を予測できる可能性がある。一方、等質的な学習者を集めてグループ編成することが、様々な学習者たちの中で多様な立場に触れて自分を知るという学習の機会を奪いかねないことについても考慮する必要がある。

岡・宗像は<sup>31)</sup>ダイエットに関する動機づけを検討した際、「意欲」や「動機」を測定する尺度が適切でなかったと考察している。このような場合にも、達成動機を意欲や動機の測定に使えるならば、健康教育の結果として達成動機の変化に注目し、動機づけを高めるような働きかけのあり方を検討することが可能であろう。

### 3. 看護者の動機づけおよび相互作用の視点から

これまでの研究をみると、達成動機の下位概念や構成要素のうち、競争的達成動機と自己充実的達成動機は、看護者自身の動機づけに対して別個の作用をしていると考えられる<sup>4,6)</sup>。自己充実的達成動機が看護者や学生の学習やリーダーシップ、職業満足等を促進することは、いくつかの研究から明らかであったが、競争的達成動機の影響についても、興味深い示唆が得られていると考える。保健婦のエンパワメントについて、筆者は自己充実的達成動機のみを取り上げ、競争的達成動機との関連を検討していない<sup>2)</sup>が、婦長のリーダーシップと達成動機との関連の研究<sup>3)</sup>からみても、競争的達成動機がエンパワメントの別の側面（例えば組織全体の中で保健婦集団の役割を示すような）を促進した可能性があると考えられる。また、看護者の職業能力の発達に外的報酬のシステムを導入したことが、動機づけにつながったとの報告<sup>32)</sup>もあり、看護者の達成動機の競争的あるいは他者評価に価値をおく側面に注目することも意義深いと考える。

速水らは、人を動機づけようとする人はまた、自分自身の存在や対応が動機づけ環境の一部となることを認識しておかなければならないと述べている<sup>7)</sup>。また、達成

動機研究の最近の主流を担う目標理論は、人は本来自らを動機づける存在であるという人間主義的な視点をもつ。看護者自身の動機づけや患者との援助関係において達成動機を考え方を取り入れることは、看護者も患者もともに学ぶ存在であることを前提とし、学習者の変化ばかりでなく援助する側の変化や相互作用にも注目することにつながり、看護領域で重視されているエンパワメントやヘルスプロモーションの考え方に沿うものであると考えられる。

## VI. 結 論

達成動機研究の流れを概観し、健康教育対象者や看護者自身の動機づけにおいて、達成動機を考え方を導入することの可能性や課題を検討した結果、以下の結論が得られた。

1. 達成動機研究は、達成動機づけを決定しているものが動機そのもの、価値と期待、目標のいずれであるかにおいて、3つの立場に分かれた。
2. 達成動機とは、「その文化や社会、あるいは自分自身が価値あると見なしている物事を成し遂げようとする意欲」と捉えることができ、競争的な側面と自己充実的な側面に分けることができる。またその2側面は、健康教育対象者や看護者自身の動機づけに対して、別個の作用をすることが考えられる。
3. 達成動機は健康教育において、適切な支援方法を予測し、あるいは評価するための対象者の特性を知るために使用しうる可能性があると考えられる。
4. 看護における各現象の中で達成動機とその下位概念の分析、類似概念との比較検討を十分に行い、その概念を用いた研究を積み重ねることによって、より適切な測定用具が提案されることが求められる。

## 文 献

- 1) Green L.W., Kreuter M.W.: Health Promotion Planning, Mayfield Publishing Company, 1991, 神馬征峰, 岩永俊博, 松野朝之他訳, ヘルスプロモーション, 31-41, 医学書院, 1997.
- 2) 門間晶子, 白井みどり, 久野孝子他: 中高年女性の自己充実的達成動機と生活習慣および自覚的健康度との関連, 第59回日本公衆衛生学会総会抄録集, 197, 2000.
- 3) 門間晶子: 保健婦のエンパワメントの構造と規定要因の分析, 日本看護科学会誌, 20(2), 11-20, 2000.
- 4) 長島ひろ子, 中野昌子, 水上弘美他: 婦長のリーダーシップに影響する要因の分析 - 勤労意欲・達成動機・社会的スキルとの関係 -, 第28回日本看護学会集録 看

- 護管理, 159-161, 1997.
- 5) 塚原節子, 高間静子, 上野栄一: 看護婦の職務満足度と個人の特性との関係 その2 - 自己実現・達成動機・独自性欲求等の満足度への影響 -, 日本看護研究学会雑誌, 19(4), 89-90, 1996.
  - 6) 松永保子, 内海滉: 看護学生の達成動機と基礎看護技術習得との関連 - これらの相互間に及ぼす影響の因子分析的検討 -, Yamagata Journal of Health Science, 2, 65-71, 1999.
  - 7) 速水俊彦, 橋良治, 西田保他: 動機づけの発達心理学, 83-86, 141-170, 有斐閣ブックス, 1995.
  - 8) 中島義明, 安藤清志, 子安増生他編: 心理学辞典 初版, 有斐閣, 東京, 1999.
  - 9) Weiner B.: Human Motivation, 林保, 宮本美砂子監訳: ヒューマンモチベーション 動機づけの心理学, 5-10, 135-204, 金子書房, 1989.
  - 10) 宮本美砂子, 奈須正裕編: 達成動機の理論と展開 続・達成動機の心理学, 1-71, 金子書房, 1995.
  - 11) McClelland D.C., Atkinson J.W., Clark R.A. et al.: The Achievement Motive, Appleton-Century-Crofts, Inc. New York, 319-333, 1953.
  - 12) 宮本美砂子, 岡野和子, 依田新: 達成動機の育成とその規定因, 教育心理学年報, 第8集, 68-75, 1968.
  - 13) Atkinson J.W.: Motivational Determinants of Risk-Taking Behavior: Psychological Review, 64, 6, 359-372, 1957.
  - 14) 堀野緑, 濱口佳和, 宮下一博編著: 子どものパーソナリティと社会性の発達, 北大路書房, 京都, 72-87, 2000.
  - 15) Dweck C.S.: Motivation Processes Affecting Learning, American Psychologist, October, 1040-1048, 1986.
  - 16) 市川伸一: 学習と教育の心理学, 岩波書店, 1-55, 98-114, 1995.
  - 17) 速水敏彦: 外発と内発の間に位置する達成動機づけ, 心理学評論, 38(2), 171-193, 1995.
  - 18) 鹿毛雅治: 内発的動機づけと学習意欲の発達, 心理学評論, 38(2), 146-170, 1995.
  - 19) 江本リナ: 自己効力感の概念分析. 日本看護科学会誌, 20(2), 39-45, 2000.
  - 20) 森和代・堀野緑: 絶望感に対するソーシャルサポートと達成動機の効果, 心理学研究, 68(3), 197-202, 1997.
  - 21) 高山智子: ストレスフルな生活出来事が首尾一貫感覚(Sense of Coherence: SOG)と精神保健に及ぼす影響, 日本公衆衛生雑誌, 46(11), 965-976, 1999.
  - 22) 土井聖陽: 達成動機の二次元説 - 親和的達成動機と非親和的達成動機 -, 心理学研究, 52(6), 344-350, 1982.
  - 23) 堀野緑: 達成動機の構成因子の分析 - 達成動機概念の再検討 -, 教育心理学研究, 35(2), 148-154, 1987.
  - 24) 堀野緑, 森和代: 抑うつとソーシャルサポートとの関連に介在する達成動機の要因, 教育心理学研究, 39(3), 308-315, 1991.
  - 25) 堀野緑: 勢力動機の二面性とソーシャルサポートの関係, 教育心理学研究, 39(4), 419-425, 1991.
  - 26) 堀野緑: 達成動機測定尺度, 心理尺度ファイル (堀野道, 山本真理子, 松井豊編), 172-175, 垣内出版, 東京, 1994.
  - 27) 門間晶子: 行政機関で働く保健婦の主体性およびコミュニティ影響力への関連要因 - 経験年数による分析 -, 名古屋市立大学看護学部紀要, 第1巻, 27-37, 2001.
  - 28) Pender N.J.: Health Promotion in Nursing Practice, Appleton & Lange, Connecticut, 1996, 小西恵美子監訳, ベンダー ヘルスプロモーション看護論, 80-112, 232-256, 日本看護協会出版会, 東京, 1997.
  - 29) 宗像恒次: 行動科学からみた健康と病気, メヂカルフレンド社, 162-196, 東京, 1996.
  - 30) 野地有子, 杉山みち子, 箕輪尚子他: 更年期女性のヘルスプロモーションと看護に関する研究, 看護研究, 30(3), 23-32, 1997.
  - 31) 岡美智代, 宗像恒次: 一人暮らしの女子学生のダイエット行動への動機づけ介入と知識提供介入の比較 自己効力感を中心として, 看護研究, 31(1), 67-75, 1998.
  - 32) 方波見柳子, 松川文子, 木村由紀子他: プライマリナースにおける外発的動機づけのシステム, 第29回日本看護学会集録 看護管理, 15-17, 1998.

(平成13年10月9日受稿)

(平成13年12月4日受理)

# Achievement Motive and Its Application to Nursing : A Review Based on Motivation for Health-educatee and Nurses

KADOMA Akiko and SHIRAI Midori

Nagoya City University School of Nursing (Community Health Nursing)

## Abstract

This study surveyed an outline of the research on the achievement motive and its application to nursing. Possibility and issue regarding the use of the achievement motivation concept for health educatee and nurses were examined.

1. The achievement motivation research include three standpoint that determine motivation: motivation itself ,expectancy and value, and goal.
2. The achievement motive is "will to accomplish things considered to be of value by culture, society and oneself". The 'Self-fulfilment achievement motive' and 'competitive achievement motive' have different function to health behavior and nurse's motivation.
3. The achievement motive can be used to understand individual character in order to predict and evaluate appropriate care strategy for learners in health education.
4. The achievement motive is an important concept in the nursing field. From now on, this low-order concept and achievement motivation will be analyzed and compared with similar concept. Moreover, research must be accumulated using this concept in various nursing phenomena, and more appropriate measures must be proposed for tools.

Key words: achievement motive, motivation, health behavior, health education, nursing administration